

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱（案）

（通則）

第1条 民間団体等（以下「補助事業者」という。）に対する低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金（以下「補助金」という。）の交付については、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号。以下「適正化法」という。）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号。以下「施行令」という。）及びその他の法令の定めによるほか、この要綱の定めるところによる。

（交付の目的）

第2条 補助金は、日本企業が有するエネルギー効率の高い技術等に係る外国人材育成を通じて産業分野でのエネルギー利用の効率化・温室効果ガスの削減に貢献するとともに、カーボンニュートラル実現に必要な日本企業等の先進技術等に係る外国人材育成を通じて社会実装に向けた理解向上や脱炭素化への認識醸成、二国間協力強化等の環境整備に取り組むことにより、アジアの新興国等を巻き込んだ脱炭素化を推進することを目的とする。

（交付の対象及び補助率）

第3条 経済産業大臣（以下「大臣」という。）は、補助事業者が行う低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業（以下「補助事業」という。）を実施するために必要な経費のうち、補助金交付の対象として大臣が認める経費（以下「補助対象経費」という。）について予算の範囲内で補助金を交付する。ただし、別紙 暴力団排除に関する誓約事項 記に記載されている事項に該当する者が行う事業に対しては、本補助金の交付対象としない。

2 補助対象経費の区分及び補助率は、別表のとおりとする。

（交付の申請）

第4条 補助事業者は、補助金の交付を受けようとするときは、様式第1による補助金交付申請書に大臣が定める書類（以下「添付書類」という。）を添えて、大臣に提出しなければならない。

2 補助事業者は、前項の補助金の交付の申請をするに当たって、当該補助金に係る消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額（補助対象経費に含まれる消費税及び地方消費税相当額のうち、消費税法（昭和63年法律第108号）の規定により仕入れに係る消費税額として控除できる部分の金額及び当該金額に地方税法（昭和25年法律第226号）の規定による地方消費税の税率を乗じて得た金額の合計額に補助率を乗じて得た金額をいう。以下「消費税等仕入控除税額」という。）を減額して交付申請しなければならない。ただし、申請時において消費税等仕入控除税額が明らかでないものについては、この限りでない。

（電子情報処理組織による申請等）

第5条 補助事業者は、前条第1項の規定に基づく交付の申請、第8条の規定に基づく申請の取下げ、第10条第1項の規定に基づく計画変更の申請、第13条の規定に基づく事故の報告、第14条の規定に基づく状況報告、第15条第1項若しくは第2項の規定に基づく実績報告、第17条第2項の規定に基づく支払請求、第18条第1項の規定に基づく消費税等仕入控除税額の確定に伴う報告又は第21条第3項の規定に基づく財産の処分の承認申請（以下「交付申請等」という。）については、電子情報処理組織を使用する方法（適正化法第26条の3第1項の規定に基づき大臣が定めるものをいう。）により行うことができる。

(電子情報処理組織による処分通知等)

第6条 大臣は、前条の規定により行われた交付申請等に係る次条第1項の規定に基づく通知、第10条第1項の規定に基づく承認、第13条の規定に基づく指示、第14条の規定に基づく要求、第16条第1項の規定に基づく通知、同条第2項の規定に基づく返還命令、同条第3項の規定に基づく納付命令(第18条第3項及び第19条第4項の規定において準用する場合を含む。)、第18条第2項の規定に基づく返還命令、第19条第1項の規定に基づく取消し若しくは変更、同条第2項の規定に基づく返還命令、同条第3項の規定に基づく納付命令、第20条第4項の規定に基づく納付命令(第21条第4項の規定において準用する場合を含む。)又は第21条第3項の規定に基づく承認について、当該通知等を補助金申請システム又は電子メールにより行うことができる。

(交付決定の通知)

第7条 大臣は、第4条第1項の規定による申請書の提出があった場合には、当該申請書の内容を審査し、補助金を交付すべきものと認めるときは、交付決定を行い、様式第2による補助金交付決定通知書を補助事業者に送付するものとする。

2 第4条第1項の規定による申請書が到達してから、当該申請に係る前項による交付決定を行うまでに通常要すべき標準的な期間は、30日とする。

3 大臣は、第4条第2項ただし書による交付の申請がなされたものについては、補助金に係る消費税等仕入控除税額について、補助金の額の確定において減額を行うこととし、その旨の条件を付して交付決定を行うものとする。

4 大臣は、第1項の通知に際して必要な条件を付することができる。

(申請の取下げ)

第8条 補助事業者は、補助金の交付決定の通知を受けた場合において、交付の決定の内容又はこれに付された条件に対して不服があり、補助金の交付の申請を取り下げようとするときは、当該通知を受けた日から10日以内に大臣に書面をもって申し出なければならない。

(補助事業の経理等)

第9条 補助事業者は、補助事業の経費及び収入については、帳簿及び全ての証拠書類を備え、他の経理と明確に区分して経理し、常にその収支の状況を明らかにしておかなければならない。

2 補助事業者は、前項の帳簿及び証拠書類を補助事業の完了(廃止の承認を受けた場合を含む。)の日の属する年度の終了後5年間、大臣の要求があったときは、いつでも閲覧に供せるよう保存しておかなければならない。

(計画変更の承認等)

第10条 補助事業者は、次の各号の一に該当するときは、あらかじめ様式第3による申請書を大臣に提出し、その承認を受けなければならない。

(1) 補助対象経費の区分ごとに配分された額を変更しようとするとき。ただし、各配分額の10パーセント以内の流用(低炭素技術輸出分野に係る人材育成事業の生産プロセス省エネ化に係る人材育成事業費及び省エネ機器等の導入・メンテナンスに係る人材育成事業費並びに先進技術展開(グリーン成長戦略)分野に係る人材育成事業のセミナー開催費、産業人材招へい費及び寄附講座開設費から、共通事業運営管理費及び評価活動費への流用を除く)増減を除く。

(2) 補助対象経費の区分のうち共通事業運営管理費及び評価活動費に含まれる、人件費(補助事業に従事する者に支払われる給与等の経費をいう)及び補助員人件費(補助事業に従事す

る補助要員に係る経費をいう)に配分された額を増額しようとするとき。

(3) 補助事業の内容を変更しようとするとき。ただし、次に掲げる軽微な変更を除く。

(ア) 補助目的に変更をもたらすものではなく、かつ、補助事業者の自由な創意により、より能率的な補助目的達成に資するものと考えられる場合

(イ) 補助目的及び事業能率に関係がない事業計画の細部の変更である場合

(4) 補助事業の全部若しくは一部を中止し、又は廃止しようとするとき。

2 大臣は、前項の承認をする場合において、必要に応じ交付の決定の内容を変更し、又は条件を付することができる。

(契約等)

第11条 補助事業者は、補助事業を遂行するため、売買、請負その他の契約をする場合は、一般の競争に付さなければならない。ただし、補助事業の運営上、一般の競争に付することが困難又は不相当である場合は、指名競争に付し、又は随意契約によることができる。

2 補助事業者は、補助事業の一部を第三者に委託し、又は第三者と共同して実施しようとする場合は、実施に関する契約を締結し、大臣に届け出なければならない。

3 補助事業者は、前2項の契約に当たり、契約の相手方に対し、補助事業の適正な遂行のため必要な調査に協力を求めるための措置をとることとする。

4 補助事業者は、第1項又は第2項の契約(契約金額100万円未満のものを除く)に当たり、経済産業省から補助金交付等停止措置又は指名停止措置が講じられている事業者を契約の相手方としてはならない。ただし、補助事業の運営上、当該事業者でなければ補助事業の遂行が困難又は不相当である場合は、大臣の承認を受けて当該事業者を契約の相手方とすることができる。

5 大臣は、補助事業者が前項本文の規定に違反して経済産業省からの補助金交付等停止措置又は指名停止措置が講じられている事業者を契約の相手方としたことを知った場合は必要な措置を求めることができるものとし、補助事業者は大臣から求めがあった場合はその求めに応じなければならない。

6 前5項までの規定は、補助事業の一部を第三者に請負わせ、又は委託し、若しくは共同して実施する体制が何重であっても同様に取り扱うものとし、補助事業者は、必要な措置を講じるものとする。

(債権譲渡の禁止)

第12条 補助事業者は、第7条第1項の規定に基づく交付決定によって生じる権利の全部又は一部を大臣の承諾を得ずに、第三者に譲渡し、又は承継させてはならない。ただし、信用保証協会、資産の流動化に関する法律(平成10年法律第105号)第2条第3項に規定する特定目的会社又は中小企業信用保険法施行令(昭和25年政令第350号)第1条の3に規定する金融機関に対して債権を譲渡する場合にあっては、この限りでない。

2 大臣が第16条第1項の規定に基づく確定を行った後、補助事業者が前項ただし書に基づいて債権の譲渡を行い、補助事業者が大臣に対し、民法(明治29年法律第89号)第467条又は動産及び債権の譲渡の対抗要件に関する民法の特例等に関する法律(平成10年法律第104号。以下「債権譲渡特例法」という。)第4条第2項に規定する通知又は承諾の依頼を行う場合には、大臣は次の各号に掲げる事項を主張する権利を保留し又は次の各号に掲げる異議を留めるものとする。また、補助事業者から債権を譲り受けた者が大臣に対し、債権譲渡特例法第4条第2項に規定する通知若しくは民法第467条又は債権譲渡特例法第4条第2項に規定する承諾の依頼を行う場合についても同様とする。

(1) 大臣は、補助事業者に対して有する請求債権については、譲渡対象債権金額と相殺し、又

は、譲渡債権金額を軽減する権利を保留する。

(2) 債権を譲り受けた者は、譲渡対象債権を前項ただし書に掲げる者以外への譲渡又はこれへの質権の設定その他債権の帰属及び行使を害すべきことを行わないこと。

(3) 大臣は、補助事業者による債権譲渡後も、補助事業者との協議のみにより、補助金の額その他の交付決定の変更を行うことがあり、この場合、債権を譲り受けた者は異議を申し立てず、当該交付決定の内容の変更により、譲渡対象債権の内容に影響が及ぶ場合の対応については、専ら補助事業者と債権を譲り受けた者の間の協議により決定されなければならないこと。

3 第1項ただし書に基づいて補助事業者が第三者に債権の譲渡を行った場合においては、大臣が行う弁済の効力は、予算決算及び会計令（昭和22年勅令第165号）第42条の2の規定に基づき、大臣が同令第1条第3号に規定するセンター支出官に対して支出の決定の通知を行ったときに生ずるものとする。

（事故の報告）

第13条 補助事業者は、補助事業が予定の期間内に完了することができないと見込まれる場合又は補助事業の遂行が困難となった場合においては、速やかに様式第4による事故報告書を大臣に提出し、その指示を受けなければならない。

（状況報告）

第14条 補助事業者は、補助事業の遂行及び収支の状況について、大臣の要求があったときは速やかに様式第5による状況報告書を大臣に提出しなければならない。

（実績報告）

第15条 補助事業者は、補助事業が完了（廃止の承認を受けた場合を含む。）したときは、その日から起算して60日を経過した日又は翌年度の5月10日のいずれか早い日までに様式第6による実績報告書を大臣に提出しなければならない。

2 補助事業の実施期間内において、国の会計年度が終了したときは、翌年度の4月30日までに前項に準ずる実績報告書を大臣に提出しなければならない。

3 補助事業者は、第1項の実績報告書をやむを得ない理由により提出できない場合は、大臣は期限について猶予することができる。

4 補助事業者は、第1項又は第2項の実績報告を行うに当たって、補助金に係る消費税等仕入控除税額が明らかな場合には、当該消費税等仕入控除税額を減額して報告しなければならない。

（補助金の額の確定等）

第16条 大臣は、前条第1項の報告を受けた場合には、報告書等の書類の審査及び必要に応じて現地調査等を行い、その報告に係る補助事業の実施結果が補助金の交付の決定の内容（第10条第1項に基づく承認をした場合は、その承認された内容）及びこれに付した条件に適合すると認めるときは、交付すべき補助金の額を確定し、補助事業者に通知する。

2 大臣は、補助事業者に交付すべき補助金の額を確定した場合において、既にその額を超える補助金が交付されているときは、その超える部分の補助金の返還を命ずる。

3 前項の補助金の返還期限は、当該命令のなされた日から20日以内とし、期限内に納付がない場合は、未納に係る金額に対して、その未納に係る期間に応じて年利10.95パーセントの割合で計算した延滞金を徴するものとする。

(補助金の支払)

第17条 補助金は前条第1項の規定により交付すべき補助金の額を確定した後に支払うものとする。ただし、必要があると認められる経費については、概算払をすることができる。

2 補助事業者は、前項の規定により補助金の支払を受けようとするときは、様式第7による精算(概算)払請求書を大臣に提出しなければならない。

(消費税等仕入控除税額の確定に伴う補助金の返還)

第18条 補助事業者は、補助事業完了後に、消費税及び地方消費税の申告により補助金に係る消費税等仕入控除税額が確定した場合には、様式第8により速やかに大臣に報告しなければならない。

2 大臣は、前項の報告があった場合には、当該消費税等仕入控除税額の全部又は一部の返還を命ずる。

3 第16条第3項の規定は、前項の返還の規定について準用する。

(交付決定の取消し等)

第19条 大臣は、第10条第1項第4号の補助事業の全部若しくは一部の中止若しくは廃止の申請があった場合又は次の各号の一に該当する場合には、第7条第1項の交付の決定の全部若しくは一部を取り消し、又は変更することができる。

(1) 補助事業者が、法令、本要綱又は法令若しくは本要綱に基づく大臣の処分若しくは指示に違反した場合

(2) 補助事業者が、補助金を補助事業以外の用途に使用した場合

(3) 補助事業者が、補助事業に関して不正、怠慢、その他不適当な行為をした場合

(4) 交付の決定後生じた事情の変更等により、補助事業の全部又は一部を継続する必要がなくなった場合

(5) 補助事業者が、別紙暴力団排除に関する誓約事項に違反した場合

2 大臣は、前項の取消しをした場合において、既に当該取消しに係る部分に対する補助金が交付されているときは、期限を付して当該補助金の全部又は一部の返還を命ずる。

3 大臣は、前項の返還を命ずる場合には、第1項第4号に規定する場合を除き、その命令に係る補助金の受領の日から納付の日までの期間に応じて、年利10.95パーセントの割合で計算した加算金の納付を併せて命ずるものとする。

4 第2項に基づく補助金の返還については、第16条第3項の規定を準用する。

(財産の管理等)

第20条 補助事業者は、補助対象経費(補助事業の一部を第三者に実施させた場合における対応経費を含む。)により取得し、又は効用の増加した財産(以下「取得財産等」という。)については、補助事業の完了後においても、善良な管理者の注意をもって管理し、補助金の交付の目的に従って、その効率的運用を図らなければならない。

2 補助事業者は、取得財産等について、様式第9による取得財産等管理台帳を備え管理しなければならない。

3 補助事業者は、当該年度に取得財産等があるときは、第15条第1項に定める実績報告書に様式第10による取得財産等管理明細表を添付しなければならない。

4 大臣は、補助事業者が取得財産等を処分することにより収入があり、又はあると見込まれるときは、その収入の全部若しくは一部を国に納付させることがある。

(財産の処分の制限)

- 第21条 取得財産等のうち、施行令第13条第4号及び第5号の規定に基づき大臣が定める処分を制限する財産は、取得価格又は効用の増加価格が単価50万円以上の機械、器具及びその他の財産とする。
- 2 適正化法第22条に定める財産の処分を制限する期間は、補助金交付の目的及び減価償却資産の耐用年数等に関する省令(昭和40年大蔵省令第15号)を勘案して、大臣が別に定める期間とする。
- 3 補助事業者は、前項の規定により定められた期間内において、処分を制限された取得財産等を処分しようとするときは、あらかじめ様式第11による申請書を大臣に提出し、その承認を受けなければならない。
- 4 前条第4項の規定は、前項の承認をする場合において準用する。

(情報管理及び秘密保持)

- 第22条 補助事業者は、補助事業の遂行に際し知り得た第三者の情報については、当該情報を提供する者の指示に従い、又は、特段の指示がないときは情報の性質に応じて、政令を遵守し適正な管理をするものとし、補助事業の目的又は提供された目的以外に利用してはならない。
- なお、情報のうち第三者の秘密情報(事業関係者の個人情報を含むがこれらに限定されない。)については、機密保持のため必要な措置を講ずるものとし、正当な理由なしに開示、公表、漏えいしてはならない。
- 2 補助事業者は、補助事業の一部を第三者(以下「履行補助者」という。)に行わせる場合には、履行補助者にも本条の定めを遵守させなければならない。補助事業者又は履行補助者の役員又は従業員による情報漏えい行為も補助事業者による違反行為とみなす。
- 3 本条の規定は補助事業の完了後(廃止の承認を受けた場合も含む。)も有効とする。

(暴力団排除に関する誓約)

- 第23条 補助事業者は、別紙記載の暴力団排除に関する誓約事項について補助金の交付申請前に確認しなければならず、交付申請書の提出をもってこれに同意したものとする。

附 則(2014307財貿第1号)

この要綱は、平成26年4月1日から施行する。

附 則(20150309財貿第3号)

この要綱は、平成27年度予算から適用する。ただし、改正前に交付した補助金に係る手続については、なお従前の例による。

附 則(20160308財貿第1号)

この要綱は、平成28年度予算から適用する。ただし改正前に交付した補助金に係る手続については、なお従前の例による。

附 則(20170307財貿第2号)

この要綱は、平成29年度予算に係るものから適用する。ただし改正前に交付した補助金に係る手続については、なお従前の例による。

附 則（２０１９０３１８財貿第３号）

この要綱は、平成３１年度予算に係るものから適用する。ただし改正前に交付した補助金に係る手続については、なお従前の例による。

附 則（２０２００３０９財貿第２号）

この要綱は、令和２年度予算に係るものから適用する。ただし改正前に交付した補助金に係る手続については、なお従前の例による。

附 則（２０２１０３０３財貿第１号）

この要綱は、令和３年度予算に係るものから適用する。ただし改正前に交付した補助金に係る手続については、なお従前の例による。

附 則（２０２２ 財貿第 号）

この要綱は、令和４年度予算に係るものから適用する。ただし改正前に交付した補助金に係る手続については、なお従前の例による。

別紙

暴力団排除に関する誓約事項

当社（個人である場合は私、団体である場合は当団体）は、補助金の交付の申請をするに当たって、また、補助事業の実施期間内及び完了後においては、下記のいずれにも該当しないことを誓約いたします。この誓約が虚偽であり、又はこの誓約に反したことにより、当方が不利益を被ることとなっても、異議は一切申し立てません。

記

- (1) 法人等（個人、法人又は団体をいう。）が、暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下同じ。）であるとき又は法人等の役員等（個人である場合はその者、法人である場合は役員、団体である場合は代表者、理事等、その他経営に実質的に関与している者をいう。以下同じ。）が、暴力団員（同法第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下同じ。）であるとき
- (2) 役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしているとき
- (3) 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して、資金等を供給し、又は便宜を供与するなど直接的あるいは積極的に暴力団の維持、運営に協力し、若しくは関与しているとき
- (4) 役員等が、暴力団又は暴力団員であることを知りながらこれと社会的に非難されるべき関係を有しているとき

別表

補助金の名称	補助事業			補助率
	補助対象経費の区分	区分経費の内訳	事業内容	
低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金	1. 低炭素技術輸出分野に係る人材育成事業			
	(1) 生産プロセス省エネ化に係る人材育成事業費	①国内人材育成事業費 ②海外人材育成事業費 ③遠隔指導・研修のための事業・環境整備費	我が国企業の現場等を活用した研修、専門家派遣等による技術指導、講師派遣等による海外での研修、遠隔での海外の企業現場への技術指導や研修を実施することにより、温室効果ガス削減に寄与する海外工場における生産プロセスの省エネ化を推進するための生産工程等を担う現地人材の育成を支援する事業に要する経費 対象国・地域：アジアの国、地域 対象業種：自動車、産業機械、電気機械分野における生産プロセスの省エネ化	中小企業：2/3 中堅企業：1/2
	(2) 省エネ機器等の導入・メンテナンスに係る人材育成事業費	①国内人材育成事業費 ②海外人材育成事業費 ③遠隔指導・研修のための事業・環境整備費	我が国企業のエネルギー効率の高い省エネ機器等に係る海外企業の工場等での導入またはメンテナンスに必要な技術等について、我が国企業の現場等を活用した研修、講師派遣等による海外での研修、遠隔での研修を実施することにより、海外企業の工場等における省エネ化・温室効果ガス削減を推進するとともに我が国企業の海外進出を支援する事業に要する経費 対象国・地域：アジアの国、地域 対象：ユーティリティ設備、生産設備、ロボット、ファクトリーオートメーション(工場のスマート化)の導入・メンテナンス	中小企業：2/3 中堅企業：1/2
	2. 先進技術展開(グリーン成長戦略)分野に係る人材育成事業			
(1) セミナー開催費	①現地セミナー ②遠隔セミナー	アジアの国・地域等でのカーボンニュートラルの実現に向けて、海外の民間企業、民間団体等の現地人材を対象に、我が国企業等の脱炭素技術についての理解醸成や普及等に向けたセミナーの実施を支援する事業に要する経費 対象国・地域：アジアの国、地域等 対象分野：グリーン成長戦略に示され	大学等・公益法人：3/4 一般法人・中小企業：2/3	

			<p>た産業分野に基づく脱炭素カーボンニュートラルに係る先進技術、アジア・エネルギー・トランジション・イニシアティブ（AETI）に基づく産業技術等</p> <p>※日本の技術、製品、サービスを用いるものに限る</p>	<p>中小企業以外の企業</p> <p>: 1 / 2</p>
<p>(2) 産業人材招へい費</p> <p>① キーパーソン招へい</p>	—	<p>アジアの国・地域等でのカーボンニュートラルの実現に向けて、海外の民間企業、民間団体等のキーパーソンとなる現地人材を対象に、我が国企業等の脱炭素技術等の理解醸成や普及等に寄与する研修等を実施するための日本への招へいを支援する事業に要する経費</p> <p>対象国・地域：アジアの国、地域等</p> <p>対象分野：グリーン成長戦略に示された産業分野に基づく脱炭素カーボンニュートラルに係る先進技術、アジア・エネルギー・トランジション・イニシアティブ（AETI）に基づく産業技術等</p> <p>※日本の技術、製品、サービスを用いるものに限る</p>	<p>大学等・公益法人</p> <p>: 3 / 4</p> <p>一般法人・中小企業</p> <p>: 2 / 3</p> <p>中小企業以外の企業</p> <p>: 1 / 2</p>	
<p>② 産業技術者招へい</p>	—	<p>アジアの国・地域等でのカーボンニュートラルの実現に向けて、海外の民間企業、民間団体等の産業技術者等を対象に、我が国企業等の脱炭素技術について海外企業等での導入、展開等に寄与する研修等を実施するための日本への招へいを支援する事業に要する経費</p> <p>対象国・地域：アジアの国、地域等</p> <p>対象分野：グリーン成長戦略に示された産業分野に基づく脱炭素カーボンニュートラルに係る先進技術、アジア・エネルギー・トランジション・イニシアティブ（AETI）に基づく産業技術等</p> <p>※日本の技術、製品、サー</p>	<p>大学等・公益法人</p> <p>: 3 / 4</p> <p>一般法人・中小企業</p> <p>: 2 / 3</p> <p>中小企業以外の企業</p> <p>: 1 / 2</p>	

			ビスを用いるものに限る	
(3) 寄附講座 開設費	①現地開設講座 ②遠隔開設講座	国・地域等でのカーボンニュートラルの実現に向けて、海外の大学において学生や社会人を対象に、我が国企業等の脱炭素技術についての理解醸成や普及等に向けた寄附講座の実施を支援する事業に要する経費 対象国・地域：アジアの国、地域等 対象分野：グリーン成長戦略に示された産業分野に基づく脱炭素カーボンニュートラルに係る先進技術、アジア・エネルギー・トランジション・イニシアティブ（AETI）に基づく産業技術等 ※日本の技術、製品、サービスを用いるものに限る	大学等・ 公益法人 ：3／4 一 般 法 人・中小 企業 ：2／3 中小企業 以外の企 業 ：1／2	
3. 共通事業運 営管理費	(1) 事業附帯費 (2) 広報関連費 (3) 事業運営管 理費	上記人材育成事業に附帯する業務、事業の普及・広報に係る業務、事業の運営管理業務に要する以下の経費 (人件費、旅費、会議費、謝金、借料及び損料、消耗品費、印刷製本費、補助員人件費、その他諸経費（振込送金手数料を含む）、委託・外注費、その他特に必要と認められるもの)	2／3	
4. 評価活動費	—	上記人材育成事業の終了後の有効性や効率性並びにアジア等における人材育成状況の長期動向等の評価に要する以下の経費 (人件費、旅費、会議費、謝金、消耗品費、補助員人件費、その他諸経費、その他特に必要と認められるもの)	定額	

※注1) 1. 低炭素技術輸出分野に係る人材育成事業の人材育成の対象となる企業は、中小企業基本法に規定する中小企業及び中小企業以外の企業であって資本金10億円未満の企業（以下「中堅企業」という。）とする。ただし次のいずれかに該当する企業は対象外とする。

①資本金又は出資金が5億円以上の法人に直接又は間接に100%の株式を保有される中小企業、及び資本金又は出資金が10億円以上の法人に直接又は間接に100%の株式を保有される中堅企業。

②交付申請時において、確定している（申告済みの）直近過去3年分の各年又は各事業年度の課税所得の年平均額が15億円を超える中小企業及び中堅企業。

※注2) 2. 先進技術展開（グリーン成長戦略）分野に係る人材育成事業の対象となる大学等には、対象分野に係る脱炭素技術の研究、実証等を行う大学、大学院、高等専門学校等の高等教育機関

が含まれる。また、中小企業の要件は注1と同様として取り扱い、これに該当しない企業（注1のただし書きに該当する企業を含む）は「中小企業以外の企業」に該当するものとして取り扱う。

(様式第1)

番 号
年 月 日

経済産業大臣 殿

申請者 住所
氏名 法人にあつては名称
及び代表者の氏名

令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付申請書

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱(20140307財貿第1号。以下「交付要綱」という。)第4条第1項の規定に基づき、上記補助金の交付について下記のとおり申請します。

なお、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律(昭和30年法律第179号。)、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令(昭和30年政令第255号)及び交付要綱の定めるところに従うことを承知の上申請します。

記

1. 補助事業の目的及び内容
2. 補助事業の開始及び完了予定日
3. 補助事業に要する経費 円
4. 補助対象経費 円
5. 補助金交付申請額 円
6. 補助事業に要する経費、補助対象経費及び補助金の配分額
7. 同上の金額の算出基礎

(注1) 申請書には、次の事項を記載した書面を添付すること。

1. 申請者の営む主な事業
2. 申請者の資産及び負債に関する事項
3. 補助事業の経費のうち補助金によって賄われる部分以外の部分の負担者、負担額及び負担方法
4. 補助事業の効果
5. 補助事業に関して生ずる収入金に関する事項
6. 申請者の役員等名簿

(注2) 消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額を減額して申請する場合は、次の算式を明記すること。

$$\text{補助金所要額} - \text{消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額} = \text{補助金額}$$

(様式第2)

番 号
年 月 日

法人にあつては名称
及び代表者の氏名 宛て

経済産業大臣 名

令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付決定通知書

令和 年 月 日付け第 号をもって申請のありました令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金については、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号。以下「適正化法」という。）第6条第1項の規定に基づき下記のとおり交付することに決定しましたので、適正化法第8条の規定に基づき通知します。

記

1. 補助金の交付の対象となる事業の内容は、令和 年 月 日付け第 号で申請のありました令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付申請書（以下「交付申請書」という。）記載のとおりとします。
2. 補助事業に要する経費、補助対象経費及び補助金の額は、次のとおりとします。

補助事業に要する経費	金	円
補助対象経費	金	円
補助金の額	金	円

ただし、補助事業の内容が変更された場合における補助事業に要する経費、補助対象経費及び補助金の額については、別に通知するところによるものとします。
3. 補助対象経費の配分及びこの配分された経費に対応する補助金の額は、交付申請書記載のとおりとします。
4. 補助金の額の確定は、補助対象経費の区分ごとに配分された経費の実支出額に補助率を乗じて得た額と配分された経費ごとに対応する補助金の額とのいずれか低い額の合計額とします。
5. （補助事業者名）は、適正化法、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）及び低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱（20140307財貿第1号。以下「交付要綱」という。）の定めるところに従わなければなりません。

なお、これらの規定に違反する行為がなされた場合、次の措置が講じられ得ることに留意してください。

（1）適正化法第17条第1項若しくは第2項の規定による交付決定の取消し、第18条第1項の規定による補助金等の返還又は第19条第1項の規定による加算金の納付

- (2) 適正化法第29条から第32条（地方公共団体の場合は第31条）までの規定による罰則
- (3) 相当の期間補助金等の全部又は一部の交付決定を行わないこと。
- (4) 当省の所管する契約について、一定期間指名等の対象外とすること。
- (5) 補助事業者等の名称及び不正の内容の公表

6. 補助金に係る消費税及び地方消費税相当額については、交付要綱の定めるところにより、消費税及び地方消費税仕入控除税額が明らかになった場合には、当該消費税及び地方消費税仕入控除税額を減額することとなります。

7. 補助事業者は、補助事業に従事した時間等を明らかにするため、以下の帳簿等を日々作成しなければなりません。

- (1) 補助事業に従事した者の出勤状況を証明するに足る帳簿等
- (2) 前号の者ごとにおいて実際に補助事業に従事した時間を証明するに足る帳簿等

8. 補助事業者は、補助事業を実施する上で、研修・専門家指導申請企業等が補助事業の経費のうち補助金によって賄われる部分以外の部分を負担した場合または研修・専門家指導申請企業等から徴収した金銭等がある場合、交付要綱第15条第1項により規定する実績報告書において収入として報告することとし、補助事業以外の用途に使用することはできません。

収入の補助事業以外への使用が判明した場合や、収入が補助事業に要する経費のうち補助金によって賄われる部分以外の額を超える場合には、その金額の一部若しくは全部を国等に返還又は補助金額の減額、研修・専門家指導申請企業等への返還指示を行う場合があります。

なお、補助事業者以外の第三者が、補助事業を実施する上で、研修・専門家指導申請企業等より金銭等を徴収した場合、補助事業者による行為とみなして本規定を適用しますので、補助事業者は第三者が補助事業を通じて不当な利益を得ることがないように管理監督を行ってください。

9. 補助事業者は、補助事業の実施にあたり第三者に業務の一部を遂行させる場合は、当該業務を遂行する能力があることを確認できた第三者と交付要綱第11条第1項から第6項に基づく契約を締結するとともに、第三者の業務の遂行について、管理監督を怠らないように注意してください。

契約には、契約目的に応じて、第三者による不適当な行為を防止するための禁止事項や、不適当な行為が生じた場合の第三者に対する事態の是正措置や損害賠償等の罰則、経理や納税処理を適切に行うことなど、補助事業を適切に遂行する上で必要となる事項を明記してください。

責任者：〇〇局〇〇課長 〇〇
担当者：〇〇、〇〇
電話：03-3501-1511(内線0000)
03-3501-0000 (直通)

(様式第3)

番 号
年 月 日

経済産業大臣 殿

補助事業者 住所
氏名 法人にあつては名称
及び代表者の氏名

令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金計画変更（等）
承認申請書

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱第10条第1項の規定に基づき、計画変更（等）について下記のとおり申請します。

記

1. 変更の内容
2. 変更を必要とする理由
3. 変更が補助事業に及ぼす影響
4. 変更後の補助事業に要する経費、補助対象経費及び補助金の配分額
(新旧対比)
5. 同上の算出基礎

(注) 中止又は廃止にあつては、中止又は廃止後の措置を含めてこの様式に準じて申請すること。

(様式第4)

番 号
年 月 日

経済産業大臣 殿

補助事業者 住所
氏名 法人にあつては名称
及び代表者の氏名

令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金事故報告書

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱第13条の規定に基づき、補助事業の事故について下記のとおり報告します。

記

1. 事故の原因及び内容
2. 事故に係る金額 円
3. 事故に対して採った措置
4. 補助事業の遂行及び完了の予定

(様式第5)

番 号
年 月 日

経済産業大臣 殿

補助事業者 住所
氏名 法人にあつては名称
及び代表者の氏名

令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金状況報告書

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱第14条の規定に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 補助事業の遂行状況
2. 補助対象経費の区分別収支概要

(様式第6)

番 号
年 月 日

経済産業大臣 殿

補助事業者 住所
氏名 法人にあつては名称
及び代表者の氏名

令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金実績報告書

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱第15条第1項の規定に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 実施した補助事業
 - (1) 補助事業の内容
 - (2) 重点的に実施した事項
 - (3) 補助事業の効果

2. 補助事業の収支決算

(1) 収 入 (単位：円)

項 目	金 額
自 己 資 金 補助金充当額	
申請企業等による負担額・ 徴収した金銭等	
合 計	

(2) 支 出

(イ) 総括表 (単位：円)

区 分	補 助 事 業 に 要 した 経 費		補 助 対 象 経 費				補 助 金 充 当 額		
	計 画 額	実 績 額	計 画 額	流 用 額	流 用 後 額	実 績 額	交 付 決 定 額	流 用 後 交 付 決 定 額	実 績 額
合 計									

(ロ) 経費の内訳 (各経費の配分ごとの実績の内訳を記載)

(注1) 当該年度に財産を取得しているときは、交付要綱第20条第3項の規定に基づき、様式第10による取得財産等管理明細表を添付することとする。

(注2) 消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額を減額して報告する場合は、次の算式を明記すること。

補助金所要額－消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額＝補助金額

(注3) 支出総括表の流用後交付決定額は、区分間の流用した場合に流用後の交付決定額を記載することとする。

(様式第7)

番 号
年 月 日

経済産業大臣 殿

補助事業者 住所
氏名 法人にあつては名称
及び代表者の氏名

令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金精算（概算）払
請求書

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱第17条第2項の規定に基づ
き、下記のとおり請求します。

記

1. 精算（概算）払請求金額（算用数字を使用すること。） 円
2. 請求金額の算出内訳（概算払の請求をするときに限る。）
3. 概算払を必要とする理由（概算払の請求をするときに限る。）
4. 振込先金融機関名、支店名、預金の種別、口座番号及び預金の名義を記載すること。

（注）概算払の請求をするときには、別紙「概算払請求内訳書」を添付すること。

(様式第8)

番 号
年 月 日

経済産業大臣 殿

補助事業者 住所
氏名 法人にあつては名称
及び代表者の氏名

令和 年度消費税額及び地方消費税額の額の確定に伴う報告書

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱第18条第1項の規定に基づき、下記のとおり報告します。

記

- | | |
|--|---|
| 1. 補助金額（交付要綱第16条第1項による額の確定額） | 円 |
| 2. 補助金の確定時における消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額 | 円 |
| 3. 消費税額及び地方消費税額の確定に伴う補助金に係る消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額 | 円 |
| 4. 補助金返還相当額（3. - 2.） | 円 |

（注）別紙として積算の内訳を添付すること。

(様式第9)

取得財産等管理台帳

区分	財産名	規格	数量	単価	金額	取得年月日	処分制限 期間	保管場所	補助率	備考
				円	円					

- (注) 1. 対象となる取得財産等は、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）第13条第1号から第3号に定める財産、取得価格又は効用の増加価格が本交付要綱第21条第1項に定める処分制限額以上の財産とする。
2. 財産名の区分は、（ア）不動産、（イ）船舶、航空機、浮標、浮さん橋及び浮ドック、（ウ）（ア）（イ）に掲げるものの従物、（エ）車両及び運搬具、工具、器具及び備品、機械及び装置、（オ）無形資産、（カ）開発研究用資産、（キ）その他の物件とする。
3. 数量は、同一規格等であれば一括して記載して差し支えない。単価が異なる場合は分割して記載すること。
4. 取得年月日は、検収年月日を記載すること。
5. 処分制限期間は、本交付要綱第21条第2項に定める期間を記載すること。

(様式第10)

取得財産等管理明細表 (令和 年度)

区分	財産名	規格	数量	単価	金額	取得年月日	処分制限 期間	保管場所	補助率	備考
				円	円					

- (注) 1. 対象となる取得財産等は、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）第13条第1号から第3号に定める財産、取得価格又は効用の増加価格が本交付要綱第21条第1項に定める処分制限額以上の財産とする。
2. 財産名の区分は、（ア）不動産、（イ）船舶、航空機、浮標、浮さん橋及び浮ドック、（ウ）（ア）（イ）に掲げるものの従物、（エ）車両及び運搬具、工具、器具及び備品、機械及び装置、（オ）無形資産、（カ）開発研究用資産、（キ）その他の物件とする。
3. 数量は、同一規格等であれば一括して記載して差し支えない。単価が異なる場合は分割して記載すること。
4. 取得年月日は、検収年月日を記載すること。
5. 処分制限期間は、本交付要綱第21条第2項に定める期間を記載すること。

(様式第 1 1)

番 号
年 月 日

経済産業大臣 殿

補助事業者 住所
氏名 法人にあつては名称
及び代表者の氏名

令和 年度低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金財産処分承認
申請書

低炭素技術を輸出するための人材育成支援事業費補助金交付要綱第 2 1 条第 3 項の規定に基づ
き、下記のとおり請求します。

記

1. 処分の内容

①処分する財産名等 (別紙) ※取得財産管理台帳の該当財産部分抜粋等

②処分の内容 (有償・無償の別も記載のこと。) 及び処分予定日

2. 処分理由